

霧の街で

田中蜜柑

——この世界に倦み疲れた人間へ。

霧の街の港で、帆船を見た。今ではめったにお目にかかれない木造帆船だ。喪に服すかのように真黒に塗装されている。帆船のシルエツトは美麗だった。霧が立ち込めていて、肌寒い。その波止場の雑踏の端に僕は立っていた。周りを見知らぬ顔ばかりで、ざわついている。僕も、みなも、待っているのだ。これから何事が起こるのを。

「何を求めて？」唐突に、後ろから声がした。見ると、二十代後半だろうか黒い長い髪の女性。僕の目からすれば美人といえる。のっけからの不躰な問いに、僕は相手の真意を推し量ろうと彼女の眼をのぞきこむ。しかし彼女は無表情でこれといった特別な感情や意図は読み取れない。僕は口を少しへの字に曲げて「なんでしようかねえ」とだけ返した。相手の不躰さに、おざなりな答えを返した。僕はまた視線を帆船に向けた。

この頃は、人込みで公然と煙草を吸うのは憚られるが、ひんやりした霧の中で少し寒いし、いつまで待つかわからなく手持ち無沙汰で、懐から煙草を一本抜き出して火をつける。なるべく控え目な動作で。しばらくすると、先ほどの女性も煙草を取り出して火を付け始めた。少しうっとおしいなと思いつつ、僕も、僕は横目でちらりと見る限りにしてぶかぶかやっていた。まあ、一人でやっているよりは、二人いた方が見る方もそういうものかと思うだろう。先程の問いに、僕は明確な答えを持っていた。ただ安息が、安らぎが欲しかった、それも無期限の。大体、それ以外に何かがあるのか。ここにいる群衆の中に、それ以外を求めている奴が居るのだろうか。

「前提条件と目的が変われば解も変わります」また唐突に隣りの女が言った。女性にしては、低い声だった。

さすがにうっとおしい。「知っていますよ」とだけ答えた。もしかしたら、あの手のやつだろとかと勘ぐり始めながら。

「あの船に乗って、死に行くのでしょうか？」やっぱり、そういう腹積もりらしい。

「駄目かい？」

「馬鹿げています。なにか悩みがあるのなら聞きますよ」

「馬鹿げていちやあ、駄目かい？」おもわず、乾いた笑いが口からでた。

「真面目なお話です」

「これは、いまでは合法だよ。何の問題もない」

「お金がないとか？」

「違うよ」

「私でよければ、何か力になれると思います」

「遠慮するよ」

「死んではいけない」彼女が言う。

「なぜ？ 君はその信仰で、自分を保っているのだ。それを壊す僕らが居ると不安になるのだろうか？」彼女が気色ばむのが感じられた。

「ともかく、こんな面倒くささともおさらばできる」

少し間を置いて「たとえば恋人がいればどうかな？」と言う。面白いジョークだと思った。ジョークだと思いたかった。

「まあ、欲しい、かな。無いよりはいいかもしれない」  
少し疲れてきた。

「国家は、最初僕らが創り僕らのためにあった。次に、国家は国家自身のために僕らが必要とした。やがて国家は崩れ、廃れた。そして今の僕らは、最初に国を創った僕らとは違う。疲れてしまった、増えすぎてしまった」

「意味がわからない」

「どうせ馬鹿げているなら、とびきり馬鹿げたやつにつきあいたい。それだけ」  
「とびきり馬鹿げたこと・・・？ 付き合いきれない」それだけ言って、彼女は雑踏の中何処かへ行ってしまった。

はたして、僕はそんなに馬鹿げているか、それは、いけないことか。ため息をついて、しばし考え込んだ。そして、「こっちこそ、付き合いきれない」と呟いた。

彼女の見ている景色と、僕の見ている景色、本当に馬鹿げているのはどっちだろう？ こんなことを言ったり考えている僕は拗ねた子供のようだ思ったが、それは、いけないことか？ とつかえひつかえ女を抱いて、酒を飲んで、煙草を吸って、安定剤を飲んで。そして、朝が来ると会社へ向かう。馬鹿げているか？ 馬鹿げていると思った。

近くのベンチに腰掛けて、オーディオプレイヤーを取り出し、轟眞の落語家の滑稽話を聴きながら、煙草を吸い、出航の時を待った。